

表紙によせて

テッポウユリ *Lilium longiflorum* Thunb.

絵：角田葉子（2005年4月）

ヤマユリ、ササユリ、カノコユリなど数々の美しいユリが自生する日本は世界に誇るユリの原産国である。そのひとつで、九州の屋久島から沖縄の八重山諸島にかけて自生するテッポウユリは、明治時代中ごろから欧米に向けて球根が大量に輸出され、今ではEaster Lilyとよばれて、世界で最も重要な花のひとつになっている。

中近東から地中海沿岸部にかけては昔からテッポウユリに似た純白のユリがあって、ギリシャ神話や旧約聖書にも現れるが、キリスト教の普及とともに、聖母マリアの清楚と純潔のシンボルとして絵画などにも描かれるようになる。これがマドンナ・リリーと呼ばれる *Lilium candidum* L. で、キリスト教の中での本来のユリである。

しかし、マドンナ・リリーは、園芸植物としてはあまり発達しなかったようで、19世紀後半以降は日本から渡った純白で清楚なテッポウユリの花が愛でられ、イースター祭やクリスマスなどの切り花や鉢植えのユリとしてマドンナ・リリーと入れ替わることになる。

ところで現在、欧米などで切り花や鉢植えとして用いられているテッポウユリ Easter Lily は、日本から渡って1930年代から米国などで選抜あるいは改良され、今日では花が美しいだけではなく病気などにも強い系統が中心となっている。（箱田）